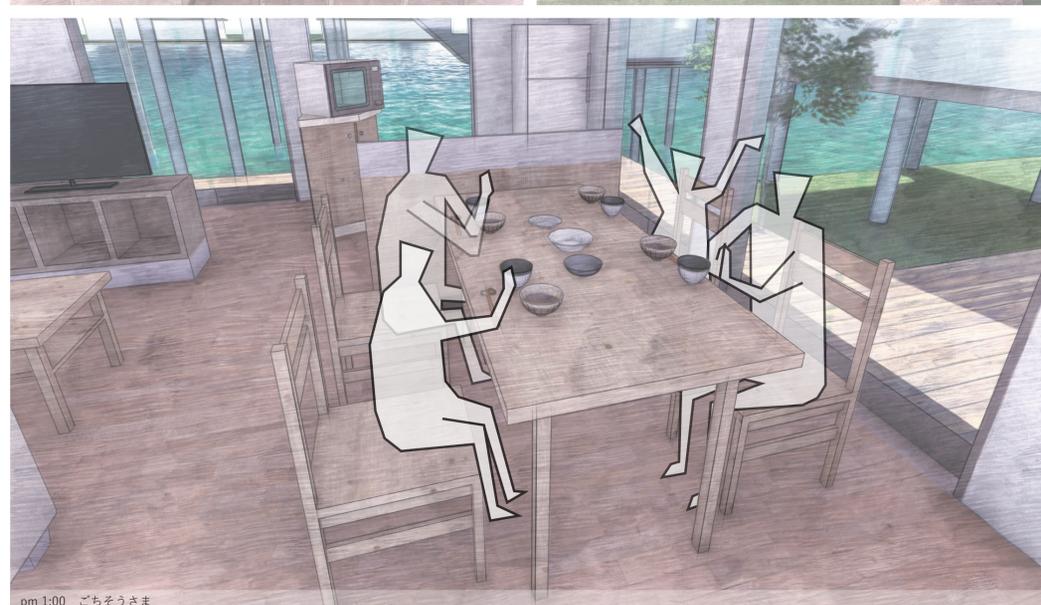
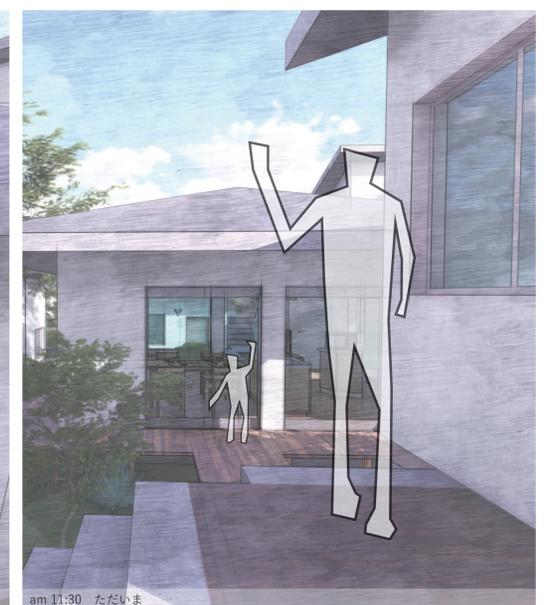
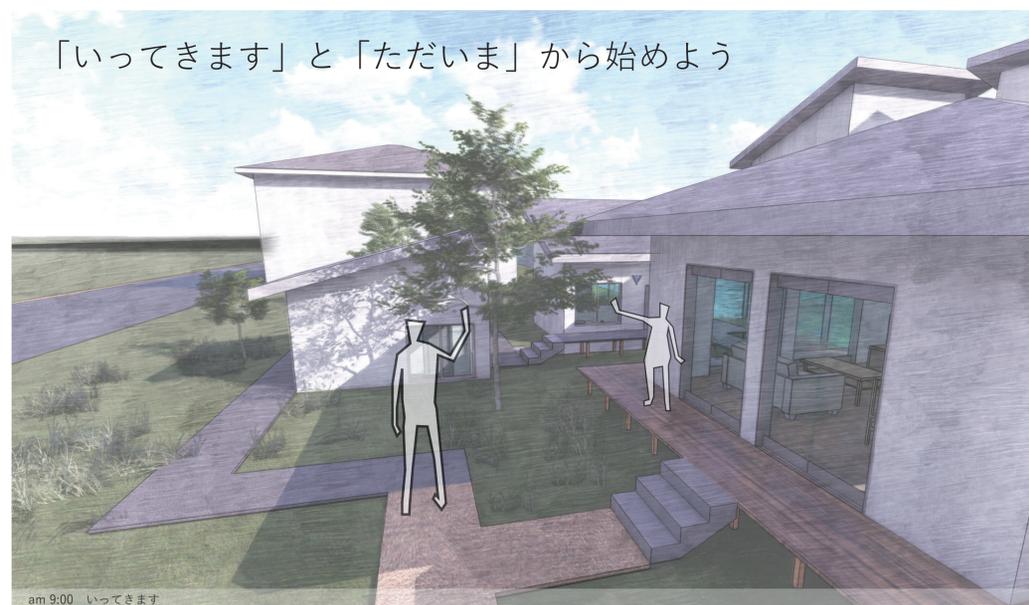


「いただきます」と「ただいま」から始めよう



01 「いただきます」「いってらっしゃい」「ただいま」「おかえり」と言える幸せ

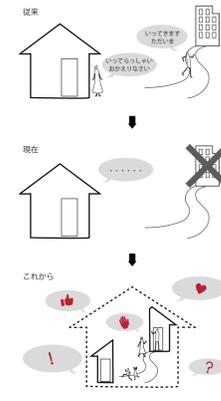
2020年、コロナウイルスにより人々は自宅で過ごす時間が増えた。家族と過ごす時間が生活スタイルも変わるなかで、住宅から消えたものがある。

それは「いただきます」と「ただいま」という挨拶である。

家族と会わない、言わば「触れない」時間があるからこそ、ともに家で過ごす「触れる」時間の大切さに気付けると考える。触れる・触れないのきっかけとなるこの二つの言葉を積極的に使っていき、これからの新しいコミュニケーションになるのではないだろうか。

「いただきます」「いってらっしゃい」「ただいま」「おかえり」は一緒に暮らしているからこそできる行為。この行為の大切さを再認識する提案である。

02 Transition 家から外への過程の喪失



ネットワークの普及により在宅ワークやオンライン授業が定式化され、住宅にいながら仕事や学習、作業が行われるようになった。これまでは職場や学校に行き、家に帰ってくるという過程があったことで、住宅というものがほかの要素から侵害されない各家庭の居場所であった。しかしその過程が省かれ、住宅の中で仕事等を行うようになったことで、「仕事をしてこよう」や「自分の居場所に帰ってきた」といった気持ちの切り替えをすることが少なくなったように感じる。

そこでは家の要素に侵害されない住宅本来の空間と、職場などの各個人のための空間を分けた計画とする。他の空間に行く際に靴を履き、「行ってきます」と言っておく。戻るときは「ただいま」と言って家族全員が過ごす空間に帰ってくる。住宅にいないからこその行為がなくなったこの二つの言葉が、今度は当たり前に使われる。そんな新しい住宅のカチを提案する。

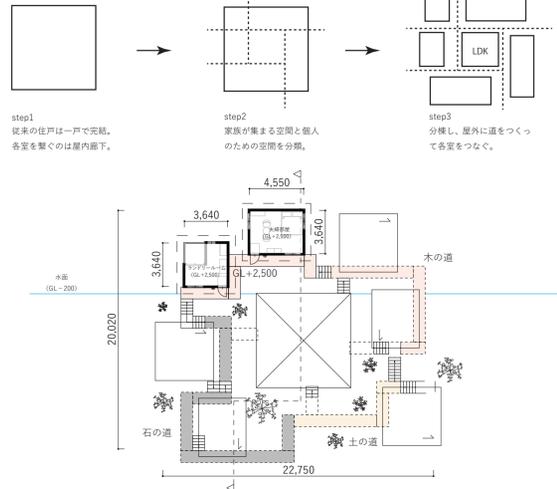
03 Element 屋外を感じさせる要素

行為	素材	建築	自然
ドアを開ける	木	階段	水
靴を履く・脱ぐ	土	屋根	植物
あいさつをする	石	通路	動物

建物が陸地と水の上に分かれて建っている。同じ通路でも材質が異なり、高さが異なり、景色が異なる。各居室の移動では毎回靴を履き、ドアを開け、挨拶をする。時間帯や季節によって挨拶が変われば、履く靴も変わってくる。

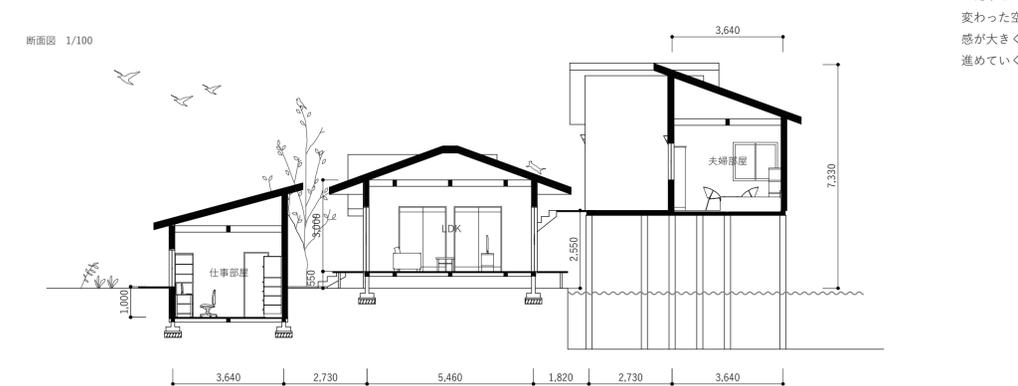
04 Plan LDKを中心とした暮らし

LDKから挨拶が生まれてくる家を目指す。室内から室内の移動では、挨拶は自然と出てこない。家から外出する際に「いただきます」は自然と口から出る。従来の『家』をLDKにあてはめ、挨拶の発生を促す。仕事を終え個人の部屋からLDKに帰ってくると、ご飯を作っている家族がいる。自然と「ただいま」「おかえり」が出てくる。



05 Section 立体的に配置された空間

行動範囲の拡大
コロナの影響により仕事を含めた多くの活動が制限され、自宅内に1日中いることでストレスが増えるようになった。そこで自宅という限られた敷地の中で、行動範囲を大きくするために居室を立体的に配置する。平面的な動きに立体的な動きが加わることで、階段の上り下りや外の空気を吸う機会が増える。行動の選択肢が増えれば、自然と気持ちも晴れやかになる。



日常感と非日常感
この住宅は大きく分けて「家族のための空間」であるLDKと、「各個人のための空間」の二つに分類される。「ありふれた設計」の前者に対して、後者は建物が地下に埋まっていたり、持ち上がっていたりと「非日常的な景色」を感じられる。変わった空間にいるからこそ、日常的な景色であるLDKの空間に帰ってきたときの安心感が大きくなる。日常的な安心できる空間があるからこそ、再び非日常的な空間へと足を進めていくことができる。

